

文化としての宗教

Religion as the Various Cultural Phases

中 澤 實 郎

目 次

一. 序

二. 日本の宗教

I. 神道

1. 神社神道

2. 皇室神道

3. 伊勢神宮

II. 仏教

1. 葬式仏教

2. 般若心経

3. 嘆異抄

三. 仏教の源流

四. ヒンドウー教

五. 世界啓示宗教（セム系一神教）

I. ユダヤ教

II. キリスト教

III. イスラム教

六. 補遺

七. 参考文献

一. 序

文化の意味を『広辞苑』は、「人間が自然に手を加えて形成してきた物心両面の成果。衣食住を初め技術・学問・芸術・道徳・宗教・政治など生活形成の様式と内容を含む。文明とほぼ同意義に用いられることが多いが、ドイツでは人間の精神的・内面的な生活にかかわるものを文化と呼び、文明と区別することがある」と説明している。これに対して司馬遼太郎は「文化とは、特定の集団（たとえば民族）においてのみ通用する特殊なもので他に及ぼしがたい不合理のもので、普遍的でない。文明は、誰れもが参加できる普遍的なもの・合理的なもの・機能的なものである」と解説する。

宗教は、特定の民族の生活様式を形成してきた文化の典型といえる。国際社会の交流の時代を迎えて、諸民族の異文化としての宗教を理解することが本論のねらいである。そのためにはまず、自国の宗教を知らねばならない。神道と仏教である。次にインドの宗教、そして、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教を考察する。

二. 日本の宗教

日本の宗教は縄文晩期、弥生初期の紀元前3世紀ごろから始まるイネづくりの農耕社会の成立とともに基本型が形成された。すなわち、生産と生活の共同体によって営まれる農耕儀礼を主体とし、自然崇拜、祖霊崇拜、呪術が発達した多神教であった。⁽²⁾ 宗教の定義を『広辞苑』は、「宗教とは神または何らかの超越的絶対者、或いは卑俗なものから分離され禁忌された神聖なるものに関する信仰・行事。また、それらの連関的体系。帰依者は精神的共同体を営む」と記している。

では、「カミ」とは何か。新井白石は、「我が国の語凡そ称してカミというは、尊尚の義なれば、君上のごとき、首長のごとき、皆これをカミといひ、近く身にとりても頭髮のごときをいひ、遠くの物においても、上なる所さしてカミといふ」と述べている。⁽³⁾ 大野晋は『日本語をさかのぼる』において、「カミとは、まず雷をさすことが多い。次に虎とか蛇、狐、オオカミとか恐るべき動物の激烈な力に対して人間が到底対抗し得ない、恐るべき存在をカミという。また、山、坂、川、道、海などは、その巨大な存在自体が威圧的であつたので、人間の恐怖の対象をカミとした。ここに見られるカミの特性は、人間によって好まれ、親しまれ、愛される存在ではない。それは、恐怖、畏怖、畏敬の対象ではあつても、人間的な交渉を持つ対象とは全然思われていない。雷、猛獣から始まって、山や川の通行をおびやかす存在とされておおり、支配者としてのカミも、恐ろしい存在としてしか把握されていない」と説明している。⁽⁴⁾ このような素朴な信仰心は現代まで、連綿と続いている。

1. 神道

日本は、神道の国である。信徒数は1118、384、223人である。

神事は元旦の参拝、七五三、受験の祈願、冠婚葬祭、季節毎の祭りなど枚挙に暇がない。神道を区分すると、①神社神道、②皇室神道、③民俗神道、④学派神道、⑤教派神道・神道系新宗教である

1. 神社神道

これは神道のもっとも代表的なもので、神社を中心として神事・祭祀を行う。

(1) 祭り

我々日本人の日常生活に馴染み深い宗教は、祭りとしての神道である。神道の重要な行事である祭りは、神道的実践の修行でもある。祭りは、神と人との出会い、和樂し、それにより生活を正常なものとして生成発展させてゆくものである。神社は、神と人が出会う場所、そこでは条件が必要である。その条件とは「礼」と「清浄」である。

(2) 礼拝

「礼拝」の対象は「御神体」と呼ばれるものである。神体は、神そのものの実体をいうのではなく、「御霊代」ともいうように、神の鎮まる依代である。即ち、樹木・岩石・山岳などのほか、島・洞窟・滝などの自然物がしばしば神の神体として祭祀の対象となっているが、古くはこれらは神そのものと考えられていた。また、社殿の発達とも関連しつつ、人工的物件（工芸品・貴重品）が御霊代とされた。鏡・剣・勾玉などはその実例である。礼拝の仕方は、「二拝二拍子一拝」である。「拝」と「拍子」が神道の礼拝作法の特色である。さらに、正式の礼拝においては、玉串を奉納する。

(3) 教典

花園神社宮司の片山文彦は次のように述べている。「神道には体系的な神学はない。神道は、日本に生まれた民族宗教であって作られたものではない。日本という風土に生まれ育った、日本人と共に出現したのが神道である。従って、教典はない。あるとすれば、それは自然、しかも日本という風土と気候よりなる自然である。しかし、何か書かれたものに寄り懸かりたいという気持ちがあるから、強いていえば、古事記。日本書紀・古語拾遺である。記・紀などには、神話の部分と歴史があるが、歴史と神話がつながっても一向にかまわない。むしろ我々の祖先は神だと考えることが、祖霊信仰にもっともなじむものである」。(3)さらに、「神道には独自の教典がないので、自然から学ぶ。自然(親神様)の命ずるままに生活を具現するわけだから、考え方が不自然になり、罪穢れの状態になれば、ただちに禊ぎ祓えをして、自然に戻る事が大切である。神道では、山・川・動植物などあらゆるものに神を見、八百万の神々の存在を認める。人間は自然の一部であり、自然を親として生かされる。自然を破壊することは、親殺しにつながる。神は自然と共に伝統を大切にする。それは、万世一系の天皇である。天皇を戴き天皇制を護持することによって、逆に守られているのである」。(5)

2. 皇室神道

皇室神道は、ヤマト政権の成立と密接に連携しているので宮廷神道とも言う。天皇が関わりをもつ神道的な祭祀の総称である。大和朝廷の神々は、高天原(タカマガハラ)を主宰する天照大神(アマテラスオホミカミ)の子孫として、天神(アマツカミ)といい、農耕儀礼を祭典の基本とした。

(1) 新嘗祭(ニヒナメ)と大嘗祭の起源

稲の収穫祭(ニヒナメ)は、農耕儀礼の中心である。古代統一国家が成立して、オホキミが最高祭司として新嘗祭を主宰した。新嘗祭の主題は、天皇が神とともに新穀を食べ、天皇が天照大神と一体化した。天武天皇の時期から毎年の新嘗祭と区別して、天皇即位式を大嘗祭と呼ぶようになった。最初の大嘗祭は西暦673年、天武天皇の代に行われた。近代以降では、明治天皇は明治4年11月17日、大正天皇は正4年11月14日、昭和天皇は昭和3年11月14日、平成は2年11月22日に行われた。いずれも、秋に行われているのは、新嘗祭の意味をもっているからである。

3. 伊勢神宮

(1) 起源

伊勢神宮の起源は、崇神天皇、垂仁天皇の時代と伝えられている。崇神天皇の時代に、疫病が流行し農民の反乱がおこったため、天皇が神意を問うた。その結果、宮中で祀っていた天照大神(アマテラスオホミカミ)と大和のヤマトオホクニタマノカミの神威をおそれて、同殿共床の神人同居を改め、この二神を朝廷の外に祀ることになったという。そして垂仁天皇26年に、アマテラスオホミカミは伊勢国五十鈴川に遷された。神体は皇位をあらわす「三種の神器」のひとつ「ヤタノカガミ」である。伊勢神宮の外宮は、トヨウケノカミを祭神としている。

伊勢神宮は、成立当初は天皇家の氏神という性格が強かったが八世紀の神祇制度の成立によって、全国の神社のなかで最高の地位を与えられ、国家的性格をそなえるに至った。伊勢神宮の地歩は、こうして古代天皇制の確立とが併行して確定した。アマテラスオホミカミは、記紀神話ではオホヒルメムチと呼ばれる高天原の主宰であるが、伊勢

神宮の神アマテラスオホミカミは、日の神、水の神、海の神など、基本的に農業神としての性格を備えている。室町時代になって、伊勢信仰の民衆化が進み、民衆の間では農業神と並んで市に祀る商業神として、現世利益信仰の対象となった。江戸時代に入ると集団参宮の「おかげまいり」「ぬけまいり」が流行した。

(2) 天皇制との関わり

普通、大嘗祭は天皇即位の後、新穀をアマテラスオホミカミ、及び天神・地祇に薦め、自らも食す神事で、その後毎年行われるものが、新嘗祭である。大嘗祭は、夜の帳（とばり）の下で行われる徹夜の儀式である。即位の礼は白昼、行われる。一方は宗教的側面であり、他方は政治的側面である。大嘗祭は、また、天皇の神格化の儀式といつてよい。

太平洋戦争は、天皇を「現人神」として先頭に立てて戦った。敗戦した時、連合国軍総司令部は、天皇の非宗教化を要求した。「神道指令」（1945年12月15日）は天皇制を以下の如く規定した。「日本ノ天皇ハソノ家系、血統或イハ特殊ナル起源ノ故ニ他国ノ元首に優ルトスル主義」。天皇の「家系、血統、起源」とは、記紀における「天孫降臨」神話を指す。それは日本の建国神話の源である。それを連合国は否定した。

連合国は「神道指令」につづいて、天皇の「人間宣言」（1946年1月2日）を出した。しかし「現人神」と「人間」とは、対立語ではなかった。神道には、人を死後だけではなく、生前にも神（ミコト）として祀る民俗があつたのである。戦後も天皇は依然として「貴種」「絶対」の人、すなわち「カミ」である。⁽⁶⁾

注 参考文献

- (1) 司馬遼太郎『アメリカ素描』39頁 読売新聞社 昭和61年
- (2) 村上重良『日本宗教事典』2頁 講談社学術文庫 1988年
- (3) 大野晋『日本語をさかのぼる』70頁
- (4) 大法輪編集部『仏教・キリスト教・神道どこががうか』
- (5) 前掲書
- (6) 『キリスト教と大嘗祭』富坂キリスト教センター編 新教出版社 40頁
- (7) ひろさちや・上田賢治『神道の聖典』鈴木出版社 1992年

II. 仏教

1. 葬式仏教

(1) 葬式仏教への要因

前項で、日本は神道の国であると述べた。だが、日本は、仏教国でもある。信徒数は実に89,033,804人である。我々日本人は実に不思議な文化の中に生活している。国中いたる所に神社と寺院が所在する。そうでありながら、個人的には「無宗教」なのである。仏教国ミャンマーは、仏教が生活に溶け込んでゐるのに、日本人においては、縁が薄い。仏教の本質は、輪廻と四苦八苦の苦しみから解脱することであつた。しかし、何故、わが国においては、「葬式仏教」になつてしまつたのか。阿満利磨が興味深い分析をしているので、著書『日本人はなぜ無宗教なのか』から引用させて頂く。著者は先ず、日本の宗教を「自然宗教」と「創唱宗教」という熟語で区分する。「創唱宗教」とは、教祖と教典及び教団によつて成立している宗教である。その代表は、キリスト教、仏教、イスラム教などである。これに対して「自然宗教」は、教祖はおらず、自然発生的で、無意識に先祖たちに

よって受け継がれてきた宗教であると定義する。⁽¹⁾

次に、著者は、中世の日本人は、三つのことを信じていたという。

第一は、神仏の存在が文字通り信じられていた。第二は、仏教とともにもたらされたインド人の世界観である六道輪廻、即ち、あらゆる生き物は地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天、の六つの世界を巡り続けるということを信じていた。つまり、前世や来世の存在と生まれ変わりが信じられていた。第三は、死後、地獄や餓鬼、畜生といった世界に落ちないように、死後の世界の救済が切実に求められていた。この三者が、一体となって信じられていた時代が中世である。⁽²⁾

阿満は、その例として親鸞を取り上げる。親鸞が法然の弟子になったのは、死後地獄に堕ちないようにするにはどうしたらよいのかという悩みからであった。当時、出家して僧侶になった理由の一つは、六道輪廻の恐怖から逃れるためであった。それには仏になるのが最上の解決方法であった。仏とは、最高の知恵を身につけることによって二度と六道を輪廻することがない存在のことである。

しかし、こうした神仏への敬虔な信仰がやがて姿を変え始める。それは、儒教の徳目が加わるようになったからである。初めは、仁義礼智信という徳目を守ることが神仏への信仰とならんで強調されていたが、やがて、神仏がこの世に姿を現すのも、儒教の教え、つまり仁義礼智信を人々に実践させるためであり、仏の前で手を合わせたり、神社の社殿にぬかずかなくても、こうした儒教の教えを守っているかぎり、神仏はその人間を救うのだと教えるようになったからであるという。⁽³⁾

16、7世紀になると、新田の開発などが進み、人々はこの世の生活に自信を持ちはじめ、享樂的な人生観を持つようになった。阿満はそれを、「憂き世」から「浮世」へという。しかし、この世を楽しむといつても、死後のことがまったく気にかからないというわけではな

かった。そしてその危惧を解消してくれるのが「葬式仏教」であったと阿満は分析するのである。「葬式仏教」とは、日本に固有の仏教のあり方をさしており、日本文化のユニークな産物であって、タイやヴェトナム、中国や朝鮮半島などでは、ほとんど意味が通じないであろうという。⁽⁴⁾

「葬式仏教」の執行は、まず、僧侶によって死者に戒名や法名がつけられる。法名という呼び名は、教義上戒律を必要としない浄土真宗の教団で使用される。戒名（法名）は、おしなべて「釈○○」と記されるが、その「釈」は、釈迦の「釈」に由来しており、仏の弟子になったことを示す。もとは、生きているうちに仏教徒になった証として与えられたものであった。

つぎに、葬送が仏教儀礼で行われ、そのあと死者のための法要や年忌が、僧侶を招いて行われる。具体的に言えば、初夜、二七日（ふたなのか）、四七日、四九日の法要があり、一周忌の後、普通は三三回忌で終了する。そして、盆や命日には墓参りをする。家には仏壇があって位牌が置かれている。これが「葬式仏教」である。

(2) 葬式仏教の定着

仏教はもともと死者祭祀には関心がなかった。ゴータマ・ブッダは自分が死んでも、葬式は在家の信者に任せて弟子たちは修行に励むように教えている。インドでは、七世紀後半にいたるまで、火葬場で簡単な経文を読み上げるだけだったという。

阿満は、その仏教が、死者祭祀に深く関わるようになったのは、「孝」という価値を重んじる中国に伝わってからだと言う。⁽⁵⁾ 生前に親に「孝」を尽くすのみならず、亡き親に対しても「孝」を尽くす。加えて、中国では、この世でどのような善行を実践したか、その分量が死後の幸、不幸を決めるとも信じられていた。そこで、子は亡き親の死

後の幸福を願って、亡き親にかわってこの世で善行を積む、そのもつとも効果のあるものが、仏への供養であったというのである。

さらに、13世紀の法然による専修念仏の登場も「葬式仏教」の成立の上で大きな意義があつたと阿満は言う。^⑥法然の念仏はそれまでの念仏とは異なり、死者の鎮魂慰霊の呪文ではなく、阿弥陀仏の救済原理を明らかにして、生きている人間の救済を対象とした。阿弥陀仏は、その人間が善人であろうが悪人であろうが、自分の名前を呼ぶものはすべて自分の国、西方極楽浄土に迎えとって仏とするという誓いをもっている。法然の念仏は、あくまでも生きている人間のためのものであり、一人一人が阿弥陀仏を信じるかどうかという決断の上で成立する宗教であつて、死者の鎮魂慰霊のためのものではなかった。しかし、生前の在り方は不問に付して、死者を阿弥陀仏の慈悲にゆだねるという、生きている人間のおもいやりが、「葬式仏教」を支えることになったのだというわけである。^⑦

(3) 「ホトケ」の由来

死者を「ホトケ」と呼ぶことこそ、「葬式仏教」の極致であると阿満は述べる。^⑧それは、死者を祭れば、「ホトケ」になるという信仰こそが、「浮世」の享楽や儒教の道徳主義(道徳を守ってさえおれば人生は充実したものになる)を可能にしたのである。では、なぜ死者を「ホトケ」というのか。仏教では本来「仏」は「ブツ」と読まれてきた。「ブツ」は「ブツダ」に由来する。ブツダの意味は、「覺者」、「悟った人」である。決して「死者」を意味しない。このインドの「ブツダ」という音に中国人は「仏」という漢字を当てた。「仏」は中国語である。これに対して「ホトケ」という読み方は日本語である。「仏」という漢字を中国音の「ブツ」ではなく、「ホトケ」と読むようになったのはなぜか。いまだに結論は出ていないという。柳田国男は、「ホトケ」とは、

「ホトキ」という器物に食べ物をいれて祭る霊のことで、中世の盆の行事から始まったと説明する。これに対して、有賀喜左衛門は、「ホトケ」という表現は、死者を祭るとき、死者の靈魂を寄りつかせるために使われる木の枝が、「フトキ」と呼ばれていたことから転じたという。阿満は、死者を「ホトケ」と称するのは、仏教本来の教えによるというよりも、仏教以前の日本の「自然宗教」の考え方が深くかわっていた。つまり、「ホトケ」とは、伝統的な「カミ」の一種であると結論づける。^⑨

ところで、死者を「ホトケ」と呼ぶのが一般化するのは、仏教僧侶による葬送と法事が普通となる、近世になってからで、死者が生前、仏教に帰依していなくても葬儀の際に、僧侶から引導を受けて戒名を授けられ、釈迦の弟子となれば、「仏」となることができると信じられた。さらに、江戸時代の半ばころから、死骸そのものを「ホトケ」と呼ぶようになった。人は死ねば、「ホトケ」になる。このように、死後の安楽の保証が約束されているために、この世を生きている間にも、創唱宗教を選び取る必要はなかった。だから多くの日本人は、安心して「無宗教」を標榜しているのだ、と阿満はいう。^⑩

2. 「般若心経」

日本人に最も親しまれている経本は、『般若心経』であろう。葬式であげられるお経の殆どが『心経』だからである。私たちは、此のお経の音読を覚えている筈である。これは「観自在菩薩行深摩訶般若波羅蜜多時」で始まり、「揭帝揭帝、波羅揭帝、波羅僧揭帝、菩提僧莎訶」で終わる。意味不明でも、何故か写経に打ち込む人が後をたたない。日本仏教十三宗が一同に会して、一つのお経を読むとすれば、「心経」以外にない。それは、この経の解く般若「空」観の思想が大乗仏教の精髓だからだという。^⑪

「心経」を抜粋して紹介する。

〔一〕 観自在菩薩、行深摩訶般若波羅蜜多時、〔般若波羅蜜多を行ずる時〕、

照見五蘊皆空、〔五蘊は皆空なりと照見して〕、
度一切苦厄。〔一切の苦厄を度したもう〕。

〔二〕 舍利子、色性は空、空性は色、〔舍利子よ、色性は是れ空、空は色に異ならず、空は空に異ならず、色は空に異ならず、空は色に異ならず〕、
色即是空、空即是色。〔色は即ち是れ空、空は即ち是れ色なり〕。

〔三〕 舍利子、是諸法空相、〔この諸法は空相にして〕、不生不滅、不垢不淨。

〔四〕 是故空中、〔是の故に、空の中には〕、

無色無受想行識、〔色もなく、受・想・行・識もなく〕

無眼耳鼻舌身意、無色声香味触法、無眼界乃至無意識界。

〔五〕 無無明、亦無無明尽、〔無明もなく、亦た無明の尽きることもなし〕

乃至無老死、亦無老死尽。〔乃至老死もなく、亦た老死の尽きることもなし〕。

以下、〔六・九〕は省略。

『般若心経』は、般若（悟りの智慧）の完成の「心」を説いたお経だという。従って、『心経』を学ぶということは、「悟り」体験に参ずるということになる。観自在菩薩（観音さま）は、深い般若の智慧の完成を実践していた時に、自我の五つの構成要素（肉体、感覚、表象、意思、知識）は空だと悟って、一切の人生苦を解決した。これが『般若心経』の意味だという。¹² しかし、この経文の解釈は、一筋ではないようだ。詠み人によって違う。例えば、至道無難神師は「観自在菩

薩」とは、「観ずれば自在に在る菩薩なり」という。心眼を開いて観れば、観音さまは自己の中に在る菩薩だというのである。また白隠神師は「是非憎愛総べて拈うてば、汝に許す生身の観自在なることを」という。相対的な分別の心を投げ捨てたら、君自身が肉身の観音さまだというのである。天桂神師は、「観自在菩薩とは余人にあらず、御身なり」と言う。それは、私のこの身心の奥にいる、もう一人の、「本当の自己」を自覚して、その「本来の、真実の自己」に生きる生活のこだという以下、『般若心経』の言語を説明する。

「摩訶」は偉大、「般若」は智慧、「波羅蜜多」は、完成という意味である。「摩訶般若波羅蜜多」とは、偉大な悟りの智慧の完成という意味である。悟りの智慧とは「本来の自己の自覚」であり、自我を空じて、自己が無になるとき、法が露になる「絶対否定即絶対肯定」の論理である。浄土宗では、それを「阿弥陀仏」という。「阿弥陀」は「永遠の背汚名・無限の智慧」の意味である。「摩訶般若波羅蜜多」と「南無阿弥陀仏」とは同じであるという。¹³

「菩薩」とは、「菩提薩埵」の略語で、悟りを求める人という意味である。釈尊も悟って「仏陀」（覚者）になる前は、菩薩だったのである。

次に、「色性は空、空性は空」の「空」とは、形あるものは空で実体はないということである。だが、虚無主義ではなく、いったん否定的に見たものを、再び肯定的に見直すのだという。お経というものは理解しにくいので、この辺りで終わりにする。

3. 『歎異抄』

『般若心経』と並んでよく知られているのは、『歎異抄』である。もともと、知られているのは、たった一行の文字にすぎない。「善人なほもつて往生を遂ぐ。況んや、悪人をや」である。『歎異抄』は晩年の親鸞に

近侍した唯円が、師の教えが異なつてゆくのを嘆き、彼自身が親鸞真実の教えと信ずるところを記したものである。『歎異抄』は全体で第十八章から成立している。ここでは、第一章と第三章の「善人なほもつて」を取り扱う。

第一章

「弥陀の請願不思議に助けられまいらせて、往生をば遂ぐるなりと信じて、念仏申さんと思ひ立つ心の起る時、即ち、摂取不捨の利益に預けしめ給ふなり。弥陀の本願には、老少・善悪の人を扱はれず。ただ、信心を要とすと知るべし。その故は、罪惡深重・煩惱熾盛の衆生を助けんがための願にてまします。しかれば、本願を信ぜんには、他の善も要にあらず。念仏に勝るべき善なき故に。悪をも怖るべからず。弥陀の本願を妨ぐる程の悪なきが故に」。

安良岡氏の訳注⁴⁰

「阿弥陀仏の請願の不思議な力にお助けいただいて、極楽浄土に生まれることができるのだ」と信じて、念仏をとえようと思ひ立つ心が生ずるとき、即座に、阿弥陀仏は、救いとお捨てにならぬご利益を人間にお受けさせになるのである。この弥陀の本願におかせられては、老人・年少者・善人・悪人というように、人間を差別してはお選びにならない。ただ、それを信ずる心が肝要であると心得なくてはならない。その理由は、罪惡が深く、煩惱が盛んな、一切の生き物を救おうするための願であらせられるからである。

それだから、弥陀の本願を信ずるには、ほかのどんな善事も、必要ではない。念仏よりまさるはずの善はないのであるから。悪事をも恐れてはならぬ。弥陀の本願を妨げるほどの悪はないのであるから。

第三章 「善人なほもつて往生を遂ぐ。況んや、悪人をや」

しかるを、世の人常に言はく、「悪人なほ往生す。いかに況んや、善人をや」。この条一旦、その言はれあるに似たれども、本願他力の意趣に背けり。その故は、自力作善の人は、偏へに、他力を頼む心欠ける間、弥陀の本願にあらず。しかれども、自力の心を翻して、他力を頼み、奉れば、真実報土の往生を遂ぐなり。

煩惱具足のわれらは、いずれの行にても、生死を離ることあるべからずを憐れみ給ひて、願を起し給ふ本意、悪人成仏のためなれば、他力を頼み奉る悪人、もつとも、往生の正因なり。よつて善人だにこそ往生すれ、まして、悪人は、と仰せ候ひき。

安良岡氏の訳注

善人でさえも往生ができる。まして、悪人は言うまでもない。ところが、世間の人は、普通には、「悪人でさえ往生する。まして、善人は言うまでもない」と言っている。このことは、一応、理由があるようであるが、弥陀の本願の他力にもとづく救いの本旨にそむいている。

なぜかという、自己の力に頼つて善事をなす人は、弥陀の他力をいわずに、信賴する心が欠けているから、弥陀の本願から外れている。しかしながら、その自己の力を頼む心をすっかり改めて、弥陀の他力をお頼り申し上げれば、まことの浄土の往生ができるのである。すべての煩惱を身につけているわたしたちは、どんな修行によつても、生死を重ねる迷いの境地を逃れることができないことを、阿弥陀仏がお憐れみになつて、救おうとなさる願を起しになるご目的は、悪人も仏になれるというためであるから、弥陀の他力をお頼み申しあげる悪人が、第一に、極楽往生できる本當の因縁をなしているのである。それで、善人でさえも往生する。まして、悪人は言うまでもない、と、親鸞聖人は仰せられました。

親鸞がここであっている「善人」「悪人」とは、道德的基準によるものではない。宗教的意義におけるものであつて、特に、弥陀の本願に對する人間としての善人と悪人との区別が重要である。⁽¹⁰⁾そこで、「その故は」と言つて、以下、なぜ、「悪人」が特にすぐれて往生を遂げるものであるかを説明するのである。親鸞は、「善人」を「自力作善の人」と言い直し、その意識について、「他力を頼む心欠けたる間、弥陀の本願にあらず」と鋭く抉剔^{けつてき}している。まことに、第一章にあつたように、弥陀の本願は、「罪惡深重・煩惱熾盛の衆生を助けんがための願にてまします」のである。それなのに、自己の力を信じ、善事をなす人は、それだけ、自己の罪惡や煩惱を忘れて、本願から遠ざかることになる。そういう善人の救われる道は、自分の心を翻して、他力を頼むと、眞実報土の往生ができるのである。

この、教えは、十字架が無いが、キリスト教の「信仰義人」と共通している事柄と言われる。

注 参考文献

- (1) 阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書 2001年 11頁
- (2) 上掲書 32頁
- (3) 々 36頁
- (4) 々 48頁
- (5) 々 52頁
- (6) 々 54頁
- (7) 々 55頁
- (8) 々 63頁
- (9) 々 64頁
- (10) 々 65頁

- (11) 秋月龍・矢木誠一『般若心経を解く』講談社 昭和60年
- (12) 々 17頁
- (13) 々 23頁
- (14) 安良岡康作訳注『歎異抄』旺文社文庫 1982年 10頁
- (15) 々 131頁

三、仏教の源流

1. 仏教と葬儀

我々の日常生活の中で仏教はどのような地位を占めているだろうか。大多数の日本人は死ねば、葬儀を仏教式で執り行い、「戒名」をもらう。そして、家には仏壇が設置され、定期的に墓参と法事を営む。所謂葬式仏教と揶揄される所以である。しかし、仏教の本質は葬儀なのだろうか。

インド人の人生観によれば、人間は死によつて消滅するものではなく、生まれ変わつて次の生涯を開始する。これが「輪廻」である。輪廻は永劫につづく。この輪廻から脱出することを「解脱」という。仏教も、輪廻説を前提とし、解脱を目標とする。

次に、我々日本人は、死者を「仏」(ホトケ)と呼び、死者の靈が安らかに静まることを「成仏する」と言う。しかし、仏教学者の渡辺照宏によれば、仏教聖典の中にはそのような用法はないという。⁽¹¹⁾死によつてすべての人が「仏陀に成る」ことを承認するとすれば、仏教の体系は無用になるであろう。あるいはまた、「読経ないし念仏によつて死者が成仏する」ということも仏典の中には根拠がないと渡辺はいう。さらに、「往生」という語も、成仏と同じように「死ぬ」という意味で用いられている。しかし、仏典の用法によると、一つの生涯を終えることを「死没」といい、その後に新しい生涯を始めることを「往生」

または「来生」という。若干の漢訳仏典ではこの世界（娑婆）より優れた仏国土に生まれ変わることを強調して「往生」という。中でも西方の阿弥陀仏の極楽浄土への往生を願うことが中国で流行し、それが日本にも伝えられたのであると渡辺は述べている。これが本来の仏教であるなら、仏教は葬式の専売ではない。

では、仏教の開祖の教えは何だったのか。

2. 仏陀の伝記

仏陀の伝記の資料はサンスクリット訳、チベット語訳、漢訳等多いが、仏陀の「歴史的事実」を再構成することはできないという。^②なぜなら、歴史的記述と考えられたものが創作であったり、架空と思われる記述の裏に史実が隠されていることも珍しくないからである。すべての聖典は、ただの事実ではなくて、宗教的事実を伝えることを唯一の使命として書かれた。他の多くの宗教文学と同様に、仏教文学もまた、事実の描写という形式によつて、実は宗教的真理を説いていることが多いと渡辺照宏は述べている。^③このことは、キリスト教の文献においても同じであろう。

3. 仏陀の生涯

仏教は、紀元前560―480年頃北インドに出現した人物を開祖とする宗教である。仏陀は固有名詞ではなく、「目覚めた人」という意味である。仏陀は、サンスクリット語の「buddha」を漢字で音写したもので、「目覚めたもの」「最高の真理を悟った者」という意味で、完全な人格者のことである。

インドでは、後に仏陀となる人を菩薩と呼ぶ伝統文化があった。菩薩とは、「仏陀となる資格をそなえたもの」という意味である。すなわち、その多くの過去の生涯および、この世に生まれてから仏陀として

成道するまでを菩薩という。

彼（菩薩・仏陀）の母の名はマヤー（麻耶）と言う。マヤーは、分娩の時、ある樹の枝に手を掛け、立ったままの姿勢で、その右腕から彼を産んだ。彼はただちに地上に立つて歩み自分は仏陀となるために生まれたことを宣言したという。彼が生まれて間もない頃、アシタという仙人が山から降りて訪ねてきて、その人相を見て「この人は仏陀になる」と予言した。彼はシッダールタ（悉達多）と名づけられた。「願望が満たされたもの」という意味である。彼は17歳の時、結婚した。妃は3人いたという。王（父）は、彼のために、三つの宮殿を建て、最高の衣食を与え、女性たちを侍らした。それにもかかわらず彼は悩んだ。「世間の愚者たちは、自分が老い、病み、死ぬことを忘れ、他人の老、病、死をけがらうするが私は自分も老い、病み、死ぬことを思い、快楽を避けて修行し、静寂の境地に至りたい。」と決心する。

彼が宮殿から脱出したのは29歳の時と推定されている。彼は、出家修行者（シュラマナ）の仲間に入る。修行者は家庭を離れ、身分、財産を捨て、単独に、あるいは集団で、修行に励み、在家の信者の支持によつて生活するのが原則であった。彼はただ一人で苦行に励んだ。節食から断食に入り、呼吸を抑制した。肉体を苦しめることによつて精神的自由の境地に達しようとして死に直面したが、それでもなお目的（人間の苦悩の根本的解決）に達することはできなかった。出家生活に入ってから6年、苦行は解脱に達する道ではないことを悟つて突然、苦行を中止した。そして、瞑想によつて最高の真理を悟ることを試みたのである。彼はアシュヴァッタ、またはピッパラという樹（菩提樹）の下で坐禅して仏陀となった。仏陀の苦悩の解明は以下の通りである。

「人々は生死をくりかえし、そのたびに老死などの苦悩を受ける。老

死の原因は誕生（生）にある。誕生の原因は生存（有）にあり、その原因をさらに遡れば、執着（取）、欲望（渴愛）、感受（受）、感触（触）、間隔の機能（六処）、心と物（名色）、精神活動（識）、生活活動（行）が見いだされ、その最初の原因は根本的無知（無明）である。即ち、すべての苦悩の根源は根本的無知であると悟つたのである。したがって、根本的無知が減すれば、生活活動以下が次々に滅し、あらゆる苦悩が減するわけである。

この道理は根本的無知によつて（縁）、生活活動その他が生ずる（起）というところから「縁起説」として知られ、根本的無知から数えて老死まで、12因縁ともいう。これが仏教思想の出発点となるのである。彼が仏陀となつたのは、紀元前525年のヴァイシャーカ（太陽暦の4～5月に相当）の満月の夜（日本では12月8日）をその日にあて「成道会」という。

『転法輪經』は苦悩についての教えである。「修行僧たちよ。苦悩についての聖なる真理というのは次のとおりである。すなわち、誕生は苦悩であり、老は苦悩であり、病は苦悩であり、死は苦悩である。憎らしいものに遇うことは苦悩（怨憎会苦）であり、愛するものと別れることは苦悩（愛別離苦）であり、欲しいものが手に入らないことは苦悩（求不得苦）である。人間的存在を構成するあらゆる物質的精神的要素（五蘊盛苦）は苦悩である」。これは所謂、四苦八苦である。「この苦悩の克服についての聖なる真理は、欲望をのこりなく滅ぼし、断念し、放棄し、解脱し、執着しないこと」と書かれている。

4. 原始教団

この思想は、原始仏教教団の成立とともに発展していく。この教団は、民衆にたいして開かれていたが、実際にこの僧伽（サンガ）に入っ

て真理に到達できる者は、生産活動から離れることができた出家者に限られていた。そして、後に教団は上座部と大衆部に分かれた。紀元前3世紀、第三代アショーカ王は、自ら仏教に帰依して上座部に力を注いだ。しかし、紀元前1世紀ごろから、大乘仏教が台頭した。部派仏教の僧伽中心、出家者個人中心の在り方に対して、僧侶、在俗信者の間から反省と批判が高まり、出家、在家の別を超えて、広く社会の救済を目指す利他行の実践的信仰が唱えられた。自利本位の仏教を小乗仏教という。

5. 大乘經典

般若心經、華嚴經、阿彌陀經、大無量壽經、法華經が成立した。大乘經典には、神や死後の世界（来世）が語られ、靈魂とその輪廻が説かれた。仏教は、広範な民衆から、生命あるものの間で果てしない靈魂の生まれかわりを断ち切つて成仏でき、救済の宗教として迎えられた。その後、仏教の儀礼は呪術的要素を強めて複雑化し、現世利益信仰の対象として仏像、神像がさかんに造顕された。

3世紀末、グプタ朝の帝国が成立し、仏教は政治権力と結んで最盛期を迎え、各地に壮大な寺院が建立された。6世紀に、仏教はヒンズー教と交流を深めた。インドの仏教は、8世紀から12世紀にかけてイスラム教の進出によつて、ほとんど滅びたが、その後も、釈迦はヒンズー教の聖者として信仰された。

6. 入 滅

仏陀は、クシナガラという寒村の村はずれにあるサーラ樹の林の中で、二本の樹のあいだに北に枕を置いた寢床を設けさせ、右脇を下に両腕を重ねて身を横たえた。そして彼は弟子たちを呼び集め、仏陀、法、教団、道など疑問のあるものは申し出るように言われたが、誰ひ

とり質問するものはいない。疑問がないことを確かめた時に、次のように言われた。『では、修行僧たちよ。汝たちに告げる。もろもろの現象は移ろいゆく。怠らず努めるがよい。』これが最後の言葉であった。それは、紀元前480年前後と推定される。葬儀は遺言により七日間の荘厳な供養の儀式ののち火葬に付した。

参考文献

- (1) 渡辺照宏『仏教』岩波新書 1995年
- (2) 宇井伯壽『日本佛教外史』岩波書店 昭和43年
- (3) 増谷文雄『日本人の仏教』角川選書 昭和68年
- (4) 常磐大定『日本佛教の研究』春秋社版 昭和18年
- (5) ひろさちや・佐古純一郎『仏教とキリスト教との対話』鈴木出版 1994年
- (6) 仏教伝道協会『仏教聖典』1996年
- (7) 比屋根安定『日本宗教史』日本基督教団出版部 昭和39年
- (8) 村上重良『日本宗教事典』講談社

四 ヒンドゥー教

1. 起源

宗教という言葉で、ヒンドゥー教を理解することは誤りであると言ふ。⁽¹⁾ ヒンドゥーの語源は、サンスクリット語の「川」を意味する言葉で、インダス川の流域とそこに住む人々のことを意味づけていた。ヒンドゥー教には仏教やキリスト教のように特定の開祖はいないし教義もない。宗教だけではなく、習俗や慣習、社会制度などすべてにわたる概念で、「文化複合体」の意味である。⁽²⁾

古来インドには元々ドラヴィダ系の人々が住んでいた。彼らの信

仰は動物崇拜や樹木崇拜、生殖器崇拜であった。其処へ、コーカサス地方からアーリヤ人がイランとインドへ入ってきた。彼らの宗教はバラモン教であった。インドに入ったアーリヤ人が東に移るにつれて土着の人々と接触、混血が進み、彼らの習俗・習慣がアーリヤ社会に吸収されていく。こうしてバラモン教の宗教形態が変質したのがヒンドゥー教の根幹である。⁽³⁾

アーリヤ人の本来の宗教は、供犠の宗教、つまり、犠牲獣を捧げて神様を喜ばせ、活力を与える。その代わりに、家畜の増殖や、家族の健康や子孫の繁栄を願う。そうして祭式をとおして神と人間を交換をするという構造である。

ついでながら、東へ移ったアーリア人がインド人であり、西へ移った人々がギリシャ人である。ナチス・ドイツはアーリヤ人の血統を誇り、セム人のユダヤ人を嫌ったことは歴史上の事実である。

アーリヤ人は、青銅の武器の製造技術を持っていたので、武力によってインダス文明を滅ぼしたわけであるが、其処には、井戸・浴室・給水と下水道が完備した高度の文明を持っていたことが、発掘によって知られている。インダス文明は紀元前2500年ごろから、アーリヤ人が入って来た起源前1500年ごろである。起源前1000年から起源前800年頃アーリヤ人はしだいに東のガンジス川流域へ移動して、バラモンを頂点とする社会体制を形成する。社会の成員の階層はヴァルナ(四姓)があり、職業によって区別された社会集団・カーストがある。カーストの語源はポルトガル語の「カスタ」で、「血統」「家柄」を意味する。バラモン(僧)、クシャトリア(王族)、ヴァイシャ(庶民)はアーリヤ人で、シュドラー(隸民)階級は非アーリヤ人である。他のカーストとの通婚や共食を禁じている。

2. 諸宗教が混淆してヒンドゥー教の成立

紀元前5〜6世紀ごろ、アーリヤ人と先住民との混血が進み、ガンジス河中流の肥沃な平原に進出して生産が増大し、交易の中心として都市に富裕商人層が出てくると、バラモンの儀式を批判して、みずからの修行によって宗教的境地を求めるシュラマナ(沙門)、出家と呼ばれる仏教とジャイナ教というアーリヤ的な要素からはずれる新しい宗教が出てくる。アーリヤ人は祭式を執行する階級、即ちバラモンとして社会的にも宗教的にも頂点に立って、地位が高くなると彼らに対する批判が起こってきた。例えば、仏教がアショカ王の時代(前3世紀ごろ)、一時期インドの統合理念として支配的になるが、釈迦の思想は、非バラモンの、非アーリヤ的であるため、民衆の生活の中に根をおろした時に変質した。また、仏教の初期段階では認められなかった仏像の制作が、大乘になって認められるようになった。⁵⁾この影響でバラモン教でも多くの神像が制作されるようになった。そして、グプタ朝時代(4〜5世紀)になると、伝統的なアーリヤ人の宗教や原住民の宗教、そして仏教やジャイナ教など非アーリヤ的な宗教などが混淆して一つの宗教が成立する。ヒンドゥー教は、インドの文化、社会制度、風習、生産形態にはじまり、民衆個々の心情の機微にいたるまで、複雑な文化的複合体の総称と言えるのである。

3. イスラム教との抗争

イスラム教徒のインド侵攻は、8世紀頃から始まった。12世紀に入るとその激しさを増し、略奪と侵略を繰り返した。そしてついに、1206年には、トルコ系の奴隷出身の将軍クトゥブデイン・アイバクによって、インドの最初のイスラーム王朝、奴隷王朝が成立した。そして、アクバル帝が出現するにおよんで、同朝は絶頂期を迎えた。アクバル帝の治世は、どの宗教にも寛大であったが、彼に続いた

皇帝の中には、イスラム教にもとづく強権的な支配を行ったものもいた。16世紀になるとヒンドゥー教とイスラム教の対立を超越した宗教、カーストを否定した、スイク(シーク)教が興った。

17世紀に入ると、ヨーロッパ諸国が植民地を求めて、インドにやってくるようになった。そして1757年、ブラッシーの戦いに勝ったイギリスは、ついに全インドを全面的な統治下においた。イギリスは植民地経営の手段として、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒を反目させ、分離して統治する策をとった。この結果、これまで地域的な抗争はあったものの、決定的な対立には至らなかったヒンドゥー教徒とイスラム教徒の間に溝が生じてしまった。

1947年のインド独立に際しても、ヒンドゥー教のインドとイスラム教のパキスタンが分離独立することになった。また、ヒンドゥー教徒の多い東パキスタンがバングラデシュと独立した際にも様々な問題が噴出したのである。⁶⁾

4. 神々と仏教との関連

日本の神道には、「八百万の神」(ヤオヨロズ)という表現がある。ヒンドゥー教にもヴェーダの神々が三千三百三十九柱の神がいるという。ヒンドゥー教では、主神ヴェーダブイシュヌとそれぞれの妃をはじめ、愛神、軍神、知恵の神、財宝の神、太陽神、火神など多数の神々があり、更に、各村落の守護神まで含めると夥しい数の神がいる。しかし、神々はそれぞれの活動範囲が決まっていて、お互いに他の神の領域を侵さないことになっている。ヒンドゥー教で絶大な人気を持つのはヴィシュヌ神とシヴァ神である。ヴィシュヌは元は太陽の光照作用を神格化した神であったが、やがて最高神に高められ、十の化身を持つ神として崇められるようになった。ヴィシュヌの妃はラクシュミーまたはシュリーで、仏教では吉祥天である。暁の女神ウシヤスは、

毎朝東の空に現れて夜の闇をしりぞける。雨神バルジャニアは、雷鳴・電光とともに雨を降らせ草木に生命をあたえる。シヴァは元は暴風神ルドラであったが、やがて最高神になる。リンガ(男根)はシヴァの象徴である。幸福の神ガネーシャ(歓喜天)・戦争の神スカンダ(韋駄天)は息子である。シヴァは仏教に取り入れられ、日本では大黒様となった。シヴァ侵攻とヴィシュヌ侵攻が、ヒンドゥー教の中心となっていた。この二神にブラフマーを加えた三神は一体だと考えられていた。ブラフマーは元は宇宙の最高原理で、最高神・創造神である。

ブラフマーへの信仰は一般的にはなかった。仏教では梵天とされ、日本にも伝えられた。クペーラは財産の神で、ガネーシャと共に民衆に人気があり、日本では毘沙門天と呼ばれている。サラスヴァティーは学問・音楽の神で、日本では弁天様として親しまれている。シヴァ神の妃であるカーリーは、人首の輪をかけ、血を垂らした生首を持った姿で描かれることが多い。その他にも、ヴィシュヌの化身であるクリシュナやラーマ、猿のハヌマーンなどが人々の信仰を集めている。インドでは、古来からの神々に加え、神話や伝説上の人物・動物などが信仰されている。

5. 修行と用語

(1) ヨーガ

仏教の開祖釈迦は、長年の苦行を捨て、菩提樹の下で禅定(ゼンジョウ)の内に「悟り」を得たといわれる。この禅定が、実はヨーガである。アクロバットのポーズをも含むヨーガは、美容・健康法の一つとして日本でも親しまれている。ヨーガは、インドに古くから伝えられてきた宗教的な実践方法の一つである。

ヨーガを体系づけた聖典『ヨーガ・スートラ』によると、ヨーガとは「心の作用抑制」のことである。定められた方法によって、心の集

中と統一を行い、輪廻の原因である煩悩を断ち、解脱へと至らせる修行なのである。

(2) 輪廻

命あるものが、死後次々と何らかのものに生まれ変わり、無限に生死を繰り返すこと。ヒンドゥー教では一般に、人間の本体、永遠不滅の実体であるアートマン(我)が輪廻の主体とされ、それが業の力に支配されて死と再生を繰り返すと考えられる。古くは、死者は最高天界に行き、安らかな生活を送ると考えられた。しかし時代が進むと、天界で暮らしている者も再び死ぬと考えられるようになった。

(3) 解脱

一般に善悪の行爲(業)によって、生まれ変わるものが決定されるが、インドでは苦に満ちた輪廻から開放される解脱が究極の目標であり理想だとされる。輪廻の考え方は、ヒンドゥー教やインド文化のみならず、仏教にも大きな影響を与えた。日本を含むアジア各国の宗教・文化には、輪廻の考え方が、現在も生きている。

(4) リンガ

インドで崇拜される男根像。子孫繁栄や生産力・豊饒、さらに宇宙を創造する活動力への信仰の対象。リンガ崇拜は土着の信仰であったが、ヒンドゥー教に取り入れられ、創造と破壊を司るシヴァ神やシヴァ神の持つ力の象徴とされた。

リンガは、皿のような形のヨーニ(女陰)と一対になった形で表現されることが多い。これは男女の性器の結合を表しているが、写実的ではなく、エロチイックな感じは受けない。リンガ崇拜は、人々の間でポピュラーな信仰である。信仰は寺院や祠や辻にあるリンガに、花

を捧げ、清水やヨーグルトを注ぐ。

(5) 大宇宙と小宇宙

インドでは、古くから、自然界（大宇宙）を構成する要素や現象が個人（小宇宙）を構成する要素や機能と一致するという考えを持っていた。この思想を受け継いだ究極の教えが梵我一如である。これは宇宙の最高原理であるブラフマン（梵）と個人の永遠不滅の本体であるアトマン（我）が同一であるということで、インド哲学の中心思想である。ヨーガなどの修行方法によって自己をブラフマンに合一させ、梵我が一体であることを直観することによって、苦しみに満ちた輪廻の世界から開放され、解脱が得られるとする。

6. 聖地

(1) 聖地巡礼（ティールタ・ヤートラー）

これはヒンドゥー教徒にとって重要な義務のひとつである。聖地を巡る時間が多ければ多いほど、功德を得ることが出来ると考えられている。聖地では、自分の罪を浄めて先祖を供養するために、巡礼者は河で沐浴して神に祈り、布施を行う。聖なる河での沐浴は浄めに必要な大切な儀礼なので、多くの聖地はガンジス河やヤムナー河などに面した場所にある。

(2) アラーハバード（インド最大の祭りマハー・クンプ・メーラが催される聖地）

ガンジス河とヤムナー河が合流する場所であり、その地下には、幻の河サラスワティーが流れ込んでいると信じられている。二つの河が合流する場所サンガムには、12年に1度、不死の霊薬アムリタが湧き出るといわれる。各地から集まった人々が、河の水に入り不死の霊薬を飲もうとする。

(3) ガヤー（先祖供養の聖地）

人々は先祖の解脱を願って、この地で祖霊祭を行う。後頭部の一部を残して頭を剃り上げた男性は、沐浴の後に神々と祖霊に対して供物を捧げる。そして、先祖の名を繰り返し唱えながら、先祖の解脱をひたすら祈る。

(4) ワーラーナシー（ガンジス河）

日本ではベナレスといわれ、ガンジス河での沐浴の光景が有名である。ヒンドゥー教徒にとってもっとも重要な聖地である。この地で死んだ者は、どんなに罪深い者でも、ただちに天に生まれることができると信じられている。そのため各地から、死期を迎えた老人や病人が集まり、ガンジス河に面した小さな部屋で、死後天に生まれ変わることを願って残りわずかな時を過ごす。

参考文献

- (1) 『ヒンドゥー教の本』学習研究社 1999年
- (2) 『インド・南アジア』講談社 1985年
- (3) 佐藤宏・内藤雅雄・柳沢悠『インドI』弘文堂 平成4年
- (4) 長谷川明『インド神話入門』新潮社 1993年
- (5) ひろさちや・服部正明『ヒンドゥー教の聖典』鈴木出版 1993年

五. 世界啓示宗教（セム系一神教）

序

阿満利磨の宗教の分類、「自然宗教」と「創唱宗教」については、「葬式仏教」で既に述べた。この区分を用いると、神道及びヒンドゥー

教は「自然宗教」と言えよう。これに対して、これから取り上げるユダヤ教、キリスト教、イスラム教は、明確な「聖典」を規範とする啓示宗教である。これらの宗教の本質は、「法」(規範)なのである。

I. ユダヤ教

1. ユダヤ教の成立

ユダヤ教は、イスラエル民族の歴史と深く関わっている。イスラエル民族は、草創期に登場するアブラハムという人物から始まる。彼の息子の一ひとは、エジプト人の奴隷ハガルが生んだイシユマエルである。次男は正妻サラから生まれたイサクである。イサクは、妻リベカによってエサウとヤコブという双子を生む。ヤコブ(後にイスラエルと改名)から12人の男子が生まれ、彼らがイスラエル民族の祖となるのである。この子孫から、イエス・キリストが誕生する。アブラハムは次項で扱う「契約」の最初の授与者である。

ユダヤ教の成立は、モーセがシナイ山で、ヤールエから「十戒」を授与され、契約の民となることからである。しかし厳密にいうと、バビロニア捕囚(前6世紀)以前のユダヤ人の信仰をユダヤ教とは言わない。ヤールエ信仰を民族存続の基本原理とするユダヤ人という名の宗教的・民族的共同体は、バビロニア捕囚を通して初めて成立したのである。そこで、ヤールエ信仰を「古代イスラエルの宗教」、以後を「ユダヤ教」と呼ぶことになっている。⁽¹⁾ ユダヤ教は「聖書の宗教」といわれる。それは、聖書がユダヤ人共同体の生き方の基準だからである。

キリスト教においてもアブラハムを、信仰の「父」というのである(新約聖書ロマ書4章)。イスラム教においても、アブラハムはアラブ民族の先祖である。イシユマエルは、アブラハムとハガルの子であるからだ。メッカに、イシユマエルとハガルの墓が所在するという。⁽²⁾ エル

サレムには黄金のドームが設置されている。このドームはイスラム教のモスク(礼拝堂)である。エルサレムはキリスト教の聖地でもある。エルサレムとその周辺は、かつては、ユダヤ人の祖国だったからである。勿論、其処にはシナゴーク(ユダヤ教の礼拝堂)もある。三大宗教は、アブラハムを起点としている証拠がここに示されていると言つてよい。

2. 聖典

キリスト教の『旧約聖書』がユダヤ教の聖典である。しかし、旧約聖書とは言わない。ユダヤ教の聖典のタイトルは『律法、預言者そして諸書の本』である。「律法(トーラー)」とは、「創世記」「出エジプト記」「レビ記」「民数記」「申命記」の五書で、もっとも神聖な書として特別な扱いをしている。「律法」の結集作業は、すでに王国時代末期に始まっていたが、バビロン捕囚(前597年)を通じて継続され、前400年頃に完成した。その後100年間に「預言書」が成立し、「諸書」の結集は紀元1世紀までかかった。第二の聖典は口伝律法としての、『ミシュナ』(紀元200年頃)と『ゲマラ』(完成)を集大成した『タルムード』(紀元500年頃)がある。これらは、律法の解説及び律法を解釈したものである。「タルムード」とは研究という意味である。「ミシュナ」には、613の口伝律法が収められている。農産物の暦、安息日と断食日、結婚など夫婦に関する規定、民法の手続き、神殿犠牲の供物、潔・不潔の規定などである。「パレスチナ・タルムード」には39項、「バビロニア・タルムード」には37項が収録されている。

3. 神名

「神はモーセに仰せになった。『わたしは主である。わたしは、アブラハム、イサク、ヤコブに全能の神として現れたが、主というわたしの名を知らせなかった。』モーセは神にたずねた。わたしは今イスラエ

ルの人々のところへ参ります。彼らに、あなたたちの先祖の神が、わたしをここに遣わされたのですと言えば、彼らは、その名は一体何かと問うにちがひありません。彼らに何と答えるべきでしょうか。神はモーセに言われた。『わたしはあるという者だ』と言われた。また、『わたしはあるという方がわたしを遣わされたのだ』(出エジプト記3章13節以下)。

「わたしはある」とは英語は「I AM WHO I AM, I AM THE BEING」存在そのものである。ルターは「Ich werde sein, der Ich sein werde」と訳している。「わたしはある」とは、天地の創造者、絶対者なる神、時間と場所を超えて活動する神を意味する。後で触れるが、キリスト教の「父なる神」とイスラム教の「アッラー」も本質は同じである。

「律法」の五書はJ・E・D・Pの四資料から成立している。Jは神名をヤハウェ、Eはエロヒムと呼ぶ。DはDeuteronomyで申命記を構成し、PはPriestlyで祭司である。ヘブライ語には母音表記がない。Y H W Hを「神聖四文字」といい、母音を付けてYahwehヤハウェと呼ぶが、通常は「アドナイ」(主)と呼ぶことが常であった。

4. 契約

契約は、契約遊牧民の生活の必要から生まれたものという解釈がある。例えば、羊飼いは牧草を求めて移動しなければならない。当然定住している人たちの土地を横切ったり、場所を提供してもらう必要がある。彼らと共存して平和に暮らしていかなければならない。共存するためには、一定のルールを定めてそれを守るといふ契約が必要となってくる。こうした契約の観念が、神と人間のあいだにも適用されたといふ生活習慣が背景にあったのではないかという。⁽³⁾

(1) アブラハムとの契約

ユダヤ教が成立する以前の「古代イスラエルの宗教」はヤハウェとの契約が起点となっている。最初の契約の相手は、アブラハムである。「これがあなたと結ぶ契約である。あなたは多くの国民の父となる。：わたしは、あなたとの間に、また後に続く子孫との間に契約を立て、それを永遠の契約とする。そして、あなたとあなたの子孫の神となる。わたしは、あなたが滞在しているこのカナンのすべての土地を、あなたとその子孫に、永久の所有地として与える。わたしは彼らの神となる」(創世記17章7～8節)。

この契約はアブラハム、その子イサク、そしてヤコブ(後に、イスラエルと改名)に継承されていく。

(2) シナイ契約

エジプトのシナイ山で、モーセが神から授与された「十戒」は、神とイスラエル民族との契約の具体的な「条文」である。契約とは「わたしは彼らの神となる」「わたしはあなたたちをわたしの民とする」といふ神の約束である。神の約束の条件として、十の戒めを示したのである。この戒めが、ユダヤ教の原理となる。ユダヤ教のみならず、キリスト教とイスラム教の原理となるのである。以後、これら三大宗教は「十戒」を規範とし、法としての宗教を確立することになる。以下、十戒とユダヤ教の重要な「割礼」と「律法」を取り上げる。

(3) 十戒

前文 私はお前の神ヤハウェ、お前をエジプトの地奴隷の家から導き出した者である。

第一戒 お前は私に対して他の神々をもってはならない。

第二戒 お前はお前自身のために像を造ってはならない。

第三戒 お前はお前の神ヤハウェの名をみだりに唱えてはならない。

第四戒 安息日を聖日として記憶せよ。

第五戒 お前の父とお前の母を敬え。

第六戒 お前は殺してはならない。

第七戒 お前は姦淫してはならない。

第八戒 お前は盗んではならない。

第九戒 お前はお前の友人に対して偽証を立ててはならない。

第十戒 お前はお前の友人の家を欲しがってはならない。

〔出エジプト記〕20章、「申命記」5章)

前半の第一戒から第四戒は、神と人間との関係である。唯一神教の根源となる戒めで、ユダヤ教のみならず、キリスト教とイスラム教においても共通したものである。後半は、人と人との関わり方の倫理規定である。

(4) エレミヤとの契約

北イスラエル王国は前八世紀後半にアッシリアによって滅亡し、南ユダは六世紀に滅亡と捕囚の苦難を嘗める。しかし、契約と信仰を継承してきたのは、一連の記述預言者たちであった。それは、イザヤ、ミカ、エレミヤ、エゼキエル、第二イザヤ、アモス、ホセアなどである。その中でエレミヤは新しい預言を語る。「見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出したときに結んだものではない。わたしが彼らの主人であったにもかかわらず、彼らはこの契約を破ったと主は言われる。しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしに民となる。」(エレミヤ書31章31〜33節)。

最後の晚餐の席上でイエス・キリストは杯を取り上げて、「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である」と言われた(ルカ22章20節)。ユダヤ教において、継承されている重要な掟は、「割礼」、「安息日」、「食物」規定である。これを守ることがユダヤ教徒の証しである。

5. 割礼

割礼は、神がアブラハムに契約の永遠の徴として示したものである。「あなたがた、およびあなたの後に続く子孫と、わたしの間で守べき契約はこれである。すなわち、あなたがたの男子はすべて、割礼を受ける。包皮の部分を切り取りなさい。これが、わたしとあなたがたとの間の契約のしるしとなる。…生まれて八日目に割礼を受けなければならない。それによって、わたしの契約はあなたの体に記されて永遠の契約となる」(創世記17章10以下)。「八日たつて割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた」(ルカ2章21節)。

6. 安息日

神道と仏教には、安息日規定というものがない。一週間の特定の日に神社参拝とか寺に詣でる習慣はないし、休日規定もない。十戒の第四戒に「安息日を心に留め、これを聖別せよ。六日の間働いて、何であれあなたの仕事をし、七日目は、あなたの神、主の安息日であるから、いかなる仕事もしてはならない。あなたも、息子も、娘も、男女の奴隷も、家畜も、あなたの町の門の中に寄留する人々も同様である。」(出エジプト記20章8節以下)。

ユダヤ教は土曜日を、キリスト教は日曜日、イスラム教は金曜日を安息日としている。この日は、仕事を休みそれぞれの施設で礼拝を捧

げるのである。日本では、キリスト教に習って、暦は西洋暦（キリスト暦）を用いて、日曜日を休日としている。

7. 食物規定

今日の日本社会には、宗教的な食物規定というものはない。ユダヤ教には厳格な禁忌規定が示されている。イスラム教にも継承されているが、キリスト教はその伝統はない。宗教は「法」であって、それが食物に関する規定であるというのが、我々日本人にとって、最も理解していない点である。食物規定は、言わば異文化の典型である。

食物規定は、「レビ記」11章の「清いものと汚れた者に関する規定」として記されている。

食べてよい動物。ひずめが分かれ、反すうするもの。牛、羊、山羊、鹿など。

食べてはならない動物。らくだ、狸、猪（豚）など。

食べてよい魚類。ひれ、うろこのあるもの。

食べてはならない鳥類は、鷲、からす、こうもり、爬虫類。

なぜ、豚が禁止されたのだろうか。神学者マルチン・ノートは、その理由を次のように説明している。「異教の祭儀または迷信的観念とそれに対応する儀式と結合していたからである」⁽⁴⁾。

8. 諸宗教にも食物タブーというものがあるので紹介しておく。

(1) 仏教は、飲酒・食肉・食五辛の戒

『梵網経』という經典に挙げられている。食五辛とは、にんにく、のびる、ネギ、やまにんにく、からしなどである。これらの戒めは出家修行僧に適用される規律である。

(2) キリスト教は、汚れた物は何もない。

(3) イスラムは、豚肉、酒を禁止

『コーラン』に、「汝らに食べることを禁じるのは、死肉、血、豚の肉、それに神以外の邪神に捧げられたもの、ただそれだけである」(16章116節)とある。豚肉については伝承によれば、「マリアの子、イエスは、正義の王として汝ら人民の上に天より降る時、十字架を壊ち、すべての豚を殺すだろう」とのムハンマドの言葉に帰せられているという。

(4) 神道は、神は酒を喜ぶ

原則的にはタブーはない。食べ物は神様から賜ったものであり、生命を支える根源的なものだから、有難く頂くことを基本とする。⁽⁵⁾

注 参考文献

- (1) 『聖書』（新共同訳）日本聖書協会 1993年
- (2) 石田友雄『ユダヤ教史』山川出版社 1980年 P 81
- (3) 山本七平『聖書の常識』講談社 昭和50年
- (4) ひろさちや・石川耕一郎『ユダヤ教の聖典』鈴木出版社 1993年 P 44
- (5) 『仏教・キリスト教・イスラーム・神道どこがちがうか』大法輪閣 P 138

II. キリスト教

外来の仏教は、我が国の文化形成に多大の影響を与え、土着して仏教国と言われるほどになった。ヒンドウー教、ユダヤ教、イスラム教の影響は皆無である。しかし、キリスト教は多少影響を与えた。先ず、クリスマスとサンタクロースである。寺の幼稚園でもクリスマスを祝う次に、教育である。明治の初頭、プロテスタント派の宣教師たちは、キリスト教学校設立に力を注いだのである。いわゆるミッシヨンス

クールである。私立学校はキリスト教が先駆者である。創立百年を越えた学校は数多い。多くの学生が巣立っていった。最後は、結婚式である。かつては、神前・仏前で行われた。今は、どのホテルでもチャペルを設置している。だが、信徒数は人口の1%にすぎない。不思議な現象である。

1. イエスの生涯

(1) 誕生

キリスト教は紀元一世紀初頭、ローマ支配下のユダヤで、イエス・キリスト(前4?~30年^①)によってひらかれた。イエスという名はユダヤ人の男の子につけられるもので、日本の太郎・次郎と同じである。キリストは名ではなく、メシア(救い主)のギリシャ語訳である。イエス・キリストとは、人間イエスは、救い主であるという信仰告白である。この告白によってキリスト教は成立する。またこの告白は、キリスト教が、ユダヤ教とイスラム教と違う唯一の点である。新約聖書はイエスの生涯を、旧約の預言の成就として記述する書物といてよい。イエスの出来事を聖書の証言から此の項をとりあげる。

まず、誕生からして尋常ではない。マタイ福音書によると「母マリヤはヨセフと婚約していたが、二人が一緒にいる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。：『マリヤは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである』。このすべてのが起こったのは、主が預言者を通して言われたことが実現するためであった。『見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名をインマヌエルと呼ばれる』。この名は、『神は我々と共におられる』という意味である。」(マタイ1章18節以下)というものであった。この文言は、イザヤ書からの引用である。「それゆえ、わたしの主が御自らあなたたちにしるしを与えられる。見よ、おとめ

が身ごもって、男の子を産みその名をインマヌエルと呼ぶ」(イザヤ書8章14節)。マタイ福音書の特徴は、預言の成就として記述することにあるといえよう。

(2) 神の国

イエスが宣教を始めたのはおよそ三十歳であった(ルカ3章23節)。イエスの宣教活動は、バプテスマのヨハネから洗礼を受け、荒野で四十日間断食をして悪魔の誘惑を受けてからである(マタイ4章1節以下、マルコ1章12節)。イエスの第一声は、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」(マルコ1章15節)である。神の国とは、神の愛が現実となったことである。ユダヤ人の信仰は、いわば、「因果応報」であった。イエスは、それを否定したのである。ヨハネ福音書に、次のようなエピソードが記されている。「イエスは通りすがりに、生まれつき目の見えないひとを見受けられた。弟子たちがイエスに尋ねた。『ラビ、この人が生まれつき目が見えないのは、だれが罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか』。イエスがお答えになった。『本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである』とイエスは答えられた」(9章1節以下)。イエスは、「因果応報」を否定したのである。因果応報説は、後のカトリシズムにも「免罪符」として現れる。ヨハネが次のように尋ねた。「ヨハネは牢の中で、キリストのなされたことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、尋ねさせた。来るべ方はあなたでしょうか。イエスはお答えになった。『行って、見聞きしていることをヨハネに伝えなさい。目の見えない人は見え、足の不自由な人は歩き、らい病を患っている人は清くなり、耳の聞こえない人は聞こえ、死者は生き返り貧しい人は福音を告げ知らされている。わたしにつまずかない人は幸いである』」(マタイ11章1節以下)。イエスの答

えは、イザヤ書35章5節からの引用である。

フアリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねた。これに對してイエスは、「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ」(ルカ17章20節以下)と言われた。神の国は、愛の支配であるから、人々の寛容と赦しの姿において現れるということであろう。

律法は、イスラエルの人々の生活の規範であつたが、他方では、弱者を苦しめるものであつた。律法は、因果応報の基準だからだ。律法を守り得ない人々にとって、イエスの教えは喜びの音づれ、福音となつたのである。

パウロは律法と因果応報からの開放を自由という術語で表現した。「この自由を得させるために、キリストはわたしを自由の身にしてくださいましたのです。だから、しっかりとしなさい。奴隷の軛に二度とつながれてはなりません。」(ガラテヤ書5章1節)。

(3) 教え

イエスの教えは、律法と対立するものとなつた。例えば、マタイ福音書は「あなたがたも聞いておるとおり『目には目を、歯には歯を』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。悪人に手向かつてはならない。だれかがあなたの右の頬を打つたら、左の頬を向けなさい」(5章38節)、「あなたがたも聞いておるとおり、『姦淫するな』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。みだらな思いで他人の妻を見る者はだれでも、既に心の中でその女を犯したのである」(5章27節)、「あなたがたも聞いておるとおり『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言っておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい」(5章44節)などである。

ヨハネ福音書に以下のようなエピソードがある。「そこへ、律法学者

たちやフアリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、イエスに言つた。『先生、この女は姦通しているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法で命じています。ところで、あなたはどうか考えになりますか』。イエスは身を起して言われた。『あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、石を投げなさい』。これを聞いた者は、年長者から始めて、一人また一人と、立ち去つた」(8章1節)。愛とは、神による罪の赦しにほかならない。

(4) 十字架

イエスの言動は、律法に違反するものであつた。十戒の第一、「あなたには、わたしをおいてほかに神があつてはならない」は、一神教の大前提である。「わたし」とは、天地の創造者にして全能の神である。アブラハム、イサク、ヤコブの神であり、モーセに対しては、「わたしはある」(ヤーウエ)という名で啓示された神である。驚くことに、イエスは自分自身を「ヤーウエ」である、と語られた。例えば、ヨハネ福音書に、「人々があなたがたはいつたい、どなたですかと言つと、イエスは『わたしはある』」(8章24節、28節)と答えられたと記されている。ユダヤ教徒は、人間イエスが「メシア」であるという発言を、受容できものではなかつた。これは、死に価いするものであつた。「わたしたちには律法があります。律法によれば、この男は死罪に当たります。神の子と自称したからです」(ヨハネ18章7節)。イエスの処刑の理由は、被造物(人間)を神としたことであつた。我々日本人の宗教観からすれば、理解できないことであろう。神道では偉人を神として崇め、また、仏教では死者をホトケとして祀るからである。

ユダヤの死刑方法は石打ちで執行するが、十字架はローマの法律による処刑である。だが、イエスの死によって全てが終了したのではな

かった。

(5) 復活と聖霊降臨

キリスト教信仰の確立は、イエスの十字架の死を起点とした。正確に言えば、イエスの死と復活から始まったというべきであろう。イエスは三日目に死人から甦えられた。マルコ福音書には、「マグダラのマリヤ、ヤコブの母マリヤ、サロメの三人の女性が週の初めの日の朝早く、日が出るとすぐ墓に行った。墓の中に入ると、白い長い衣を着た若者が右手に座っているのが見えたのでひどく驚いた。若者は言った。『驚くことはない。あなたがたは十字架につけられたナザレのイエスを捜しているが、あの方は復活なさって、ここにはおられない。御覧なさい。お納めした場所である』」(マルコ16章6節)と記している。ところが、マタイには、「祭司長たちは長老たちと集まって相談し、兵士たちに多額の金を与えて言った。『弟子たちが夜中にやってきて、我々の寝ている間に死体を盗んで行った』と言いなさい。…兵士たちは金を受け取って、教えられたとおりにした。この話は、今日に至るまでユダヤ人の間に広まっている」(マタイ28章11節以下)と記されている。そして、キリスト教会の成立は「聖霊降臨」という出来事からである。この出来事は「使徒言行録」に記されている。「五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、霊が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した」(2章1節以下)。キリスト教は、この時点から弟子たちの活動によって、ユダヤからヨーロッパに宣教されていくのである。

2. 神

キリスト教は、「三位一体」(父・子・聖霊)の神という。父とは、「天地の造り主、全能の神」で、ユダヤ教のヤーウエと同じである。イエスは、「アッパ、父よ、あなたは何でもおできになります」(マルコ14章36節)と祈る。ヨハネ福音書では、「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。この方は、真理の霊である。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいる」(14章15節以下)と弟子たちに約束する。ヨハネ福音書は、神を父と述べ、イエスを神の御子、そして聖霊が同一であることを証言したのである。勿論これはユダヤ人には承認できるものではなかった。パウロはもつと、徹底した表現でコロサイ人への手紙に書いている。「御子は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれたのです。天にあるものも地にあり、見えるものも見えないものも、王座も主権も、支配も権威も、万物は御子において造られたからです。つまり、万物は御子によって、御子のために造られました。御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられています。」と(1章15節以下)。

パウロは、元来熱心なユダヤ教徒で、キリスト教徒を迫害していた人物だった。彼の経歴は「使徒言行録」に記されている。「パウロはなお主の弟子たちを脅迫し、殺そうと意気込んで、大祭司のところへ行き、ダマスコの諸会堂あての手紙を求めた。それはこの道に従う者を見つけ出したら、男女を問わず縛り上げ、エルサレムに連行するためであった」(9章1節以下)。パウロは自分の過去について「わたしは生まれて八日目に割礼を受け、イスラエルの民に属し、ベニヤミン族の出身で、ヘブライ人の中のヘブライ人です。律法に関してはファリサイ派の一員、熱心の点では教会の迫害者、律法の義については非

のうちのどころのない者でした」(フィリピ3章5節以下)と述べている。彼はその後、回心して、キリスト教徒として貢献したのである。

ここで、初期の教会会議で論争になった用語を紹介する。父なる神とイエスは同じ質の実体である、即ち「同質」という術語である。ギリシャ語でホモウーシオスと言う。「父なる神」と「子なる神」は同じ質である。全てのものの創造者、見ることでできない神、命と愛と美の源泉である神が「父なる神」である。そして、人間の歴史に関わり、我々が見、聞き、触れることのできる神が「子なる神」である。そして「聖霊なる神」という三つが「同質」である。これを巡って2世紀、3世紀、4世紀にかけて神学論争になった。これを三位一体なる神と表現し、キリスト教の信仰告白として確立したのである。^②

キリスト教会が制定した『使徒信条』は「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。我は聖霊を信ず。」と告白する。『ニケヤ信条』は、「私たちは、ただひとりの神、すべてを支配される父、天と地と見えるものと見えないもののすべての造り主を信じます。またただひとりの主イエス・キリストを信じます。また聖霊を信じます。聖霊は主、命の与え主であり、父と子から出て、父と子と共に礼拝され、共に栄光を帰せられます。」と告白する。キリスト教の本質は、この教理において示されているのである。

3. 正典

キリスト教は、ユダヤ教の『律法、預言者、諸書』39巻を、『旧約聖書』として継承する。そして、イエスの弟子たちが記した文書を『新約聖書』という。新約聖書は、27の文書から成立している。まず、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの四福音書である。ここではイエスの誕生から始まって、復活で閉じている。使徒言行録は、イエスの弟子た

ちの伝道の記録である。次は書簡で、キリスト教の内容と教え、戒めを手紙という形式を用いて述べた文書である。最後はヨハネの黙示録である。「黙示」は、啓示という意味である。キリスト教会が、旧約聖書と新約聖書を「正典」として定めたのは、397年に開催されたカルタゴ会議においてである。

「正典」(カノン)とは、ナイル川に生育する「葦」に由来する。葦の茎は、「ものさし」「規範」「基準」として用いられた。日本キリスト教団の信仰告白は、「旧新約聖書は、神の靈感によりて成り、キリストを証し、福音の真理を示し、教会の拠るべき唯一の正典なり。されば、聖書は聖霊によりて、神につき、救いにつきて、全き知識を我らに与うる神の言葉にして、信仰と生活の誤りなき規範なり」と告白している。

4. 契約

キリスト教では、聖書に「契約」という文字を重ねた。つまり、「旧約聖書」「新約聖書」と命名したのである。その理由は、ユダヤ教の「聖典」の内容に関係がある。その内容とは、「契約」である。『旧約聖書』は、数百年にわたって書かれた、歴史・律法・預言、知恵文学などの諸文書を一冊に纏めたものである。それらの文献を統一させたのは、契約にほかならない。ユダヤ人の信仰の根源には、神のアブラハムとの契約及びモーセのシナイ契約が存在していた。アブラハムに対する契約は、「わたしは、あなたとの間に、また後に続く子孫との間に契約を立て、それを永遠の契約とする。そして、あなたとあなたの子孫の神となる。わたしは、あなたが滞在しているこのカナンの子孫の土地を、あなたとその子孫に、永久の所有地として与える。私は彼らの神となる。」(創世記17章7-8節)である。アブラハムは、前2000年の人物である。シナイ契約は、モーセに対して授けられた「十戒」である。ユダヤ教は、この契約によって成立し、民族を継続

してきたのである。預言者ゼカリヤは、「万軍の主はこう言われる。見よ、日が昇る国からも日の沈む国からもわたしはわが民を救い出し、彼らを連れて来て、エルサレムに住まわせる。こうして、彼らはわたしの民となり、わたしは真実と正義に基づいて彼らの神となる。」(8章7-8節)と民に告げる。

預言者エレミヤは新しい契約を告げる。「見よ、わたしがイスラエルの家、ユダの家と新しい契約を結ぶ日が来る、と主は言われる。この契約は、かつてわたしが彼らの先祖の手を取ってエジプトの地から導き出した時に結んだものではない。わたしが彼らの主人であつたにもかかわらず、彼らはこの契約を破った、と主は言われる。しかし、来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主はいわれる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」(31章31節以下)。エレミヤは前6世紀に活躍した人物である。新約聖書は、紀元一世紀後半に書かれた文書を纏めたものである。新約文書の「ヨハネの黙示録」は次のように記す。「見よ、神の幕屋が人の間にあつて神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの涙をことごとくぬぐい取ってくださる。」(21章3節)。黙示録は、ローマ皇帝による迫害がもつとも激しい時代に書かれた文書である。迫害の中で殉教者たちを慰めたのは、この言葉であつた。今も、キリスト教の葬式では、この聖句を、死者の火葬の直前に朗読する。それは、キリスト教徒はこの言葉を天国と結び付けて、希望を抱いているからである。

注

1 キリスト紀元は、カトリック教会の教会行事の一つ、復活祭の日を決定するという問題から生み出されたと岡崎氏は『聖書VS

世界史』で述べている。この著者によると復活祭は、3月21日以後の最初の満月のあとの、第一日曜日に行われる。この規定は、コンスタンティヌス帝が開催したニケア会議であつた。6世紀はじめまで使用されていたイースター表は、アレクサンドリアのキュリロス(444年没)が算定したものであつたが、525年に、新しい表を作成しなければならなかった。

新たな表の算定をしたのは、スキタイ生まれのローマの修道士、デイオニシウス・エクシグウス(550年没)である。彼がキリスト紀元の発案者である。その理由を「われわれの長い年月を数えるとき、不信心な迫害者の名前と結びつけることを従来好まなかったから、むしろわれわれの主イエス・キリストの体現から年を数える方法を選んだ」と述べている。

彼のキリスト紀元の算定方法は、歴史的事実の探究ではなかった。まず第一に、イエスの復活が3月25日の日曜日、イエス満30歳のときの出来事であるとする。3月25日はイエスの受胎告知の日であり、天地創造の日と当時考えられていた日である。彼は初めは「主の体現より」とい言葉で年号を表したが、「主の年」に「A.D. an no Domini」という言葉が後に使われるようになった。また、イエスの誕生を通念に従って12月25日としたが、紀元の始点を1月1日にしたのも彼である。

キリスト紀元を正式に使用したのは、カール大帝である。彼は勅令に、キリスト紀元による年号と、他の世俗的文書の伝統的な年号とを組み合わせ、次のように表記した。「われわれの主イエス・キリストの体現から801年、われわれのフランクにおける統治から33年イタリア統治から18年、しかしてわがコンスル在位第一年」。

以後、時代が進むにつれ、世俗の側ではカール大帝の息子ル

イ敬虔王や、シャルル大帝なども、この形式を踏襲していく。こうしてほぼ10世紀末までには西ヨーロッパにキリスト紀元(普遍史)が定着した。

2 三位一体論は、451年11月にカルケドンで開かれた第4回世界会議において決着した。『カルケドン信条』の内容は以下の通りである。

「…主は、真に神であり真に人であり給い、人間の魂と肉をとり、神性によれば御父と同質、人性によれば主は我らと同質、罪をほかにしてすべてにおいて我らと等しくあり給い、神性によれば代々の前に聖父より生まれ、人性によれば、この終わりの時代には、主は我らのためにまた我らの救いのために、神の母である処女マリヤより生まれ給うた。この唯一のキリスト、御子、主、独子は、二つの性より(二つの性において)まさることなく、かけることなく、分けられることもできず、離すこともできぬ御方として認められねばならないのである。…」

この『信条』は、イエスと聖父は同質(ホモウーシオス)、本質が同じであると主張する告白文である。

参考文献

- (1) 『聖書』
- (2) 山本七平『聖書の常識』講談社 昭和58年
- (3) 半田元夫・今野国男『キリスト教史』山川出版社 1977年
- (4) 守安達也『キリスト教史Ⅱ』山川出版社 1977年
- (5) 岡崎勝世『聖書VS.世界史』講談社新書1996年
- (6) 中澤實郎『バルトの和解論における契約、罪、洗礼』弘前学院大学 2003年
- (7) 『信條集』I 日本基督教協議会文書事業部 昭和30年

III. イスラム教

1. 起源

イスラム教はキリスト教と同様にユダヤ教を母体として成立した宗教である。これらの宗教を「三大啓示宗教」と言う。人間の発案ではなく、神の啓示によって成立した宗教だからである。ユダヤ教とキリスト教には聖俗の区別があるが、イスラム教には聖と俗、教会と国家、宗教と政治の区別をしない。それらは、すべて神を唯一の立法者とする法、シャリーア(コーラン)のもとにある。ユダヤ教はイスラエルの民族宗教であることに固執したが、イスラム教は世界宗教としての性格を持ち普遍的、歴史的な展開をした。すなわち、人種・民族・国籍・階級を超えて世界のあらゆる人々に開放された。

「三大啓示宗教」の教典の内実は、「法」である。ユダヤ教は『旧約聖書』と『タルムード』、キリスト教は『聖書』(旧約と新約)、イスラム教は『旧約聖書』と『コーラン』がある。これらの宗教の特徴は、「生活宗教」で、日々の生活の中で、神と他者との付き合いの規範が示されている。イスラム教には、「イン・シャー・アッラー」(神の思し召し)という言葉があり、全ての事は神様がなさるという信仰がある。此の台詞をイスラム教徒は日常生活の中で頻繁に使う。

アラブ民族は、南アラブと北アラブに分かれている。この区別は、「創世記」10章に記されているセムの子孫の系譜から由来し、南アラブはカフタン(『旧約聖書』のヨクタン)の子孫である。北アラブは、アブラハムの息子イシユマエル(『創世記』16章)の子孫である。北アラブの大部分は遊牧民だったのに対して、雨量に恵まれて灌漑農業の可能な南アラブは、大部分が農業をする定住民で中継貿易も行っていた。

当時のアラビア半島には、すでにたくさんユダヤ教徒やキリスト

教徒が住んでいた。マホメットが生まれたのは、570年頃である。彼の生業はメッカの商人で、612年のある日、彼は唯一の神アッラーの啓示を受け、みずから神の使徒としての自覚を抱き、宗教家としての新しい生涯を開始した。何か特別な新しい宗教がそこで始まったというより、本来の一神教のあるべき姿を回復しようという宗教改革であった。即ち、非常に異なった言語や宗教の人々が住み合わせ、一緒に暮らす、共生するという生きかたを教えるものであった。彼が訴えたことは、「アブラハムの宗教に立ち戻れ」ということだった。信仰告白(シャハーダ)は、第一に、「ラー・イラーハ・イッラハー」(アラーの他に神的なものはない)。この信仰告白は、ユダヤ教とキリスト教に共通している、一神教である。信仰告白の第二は、「ムハンマド・ラースールッラー」(マホメットは神の使徒〔預言者〕である)。これは、ユダヤ教とキリスト教と区別される大事な告白なのである。

イスラム教の立場から言えば、最初の預言者はアダム、そして、最後の預言者がマホメットである。啓示の書物に書かれている言語は、預言者モーセを通してヘブライ語とアラム語で啓示が与えられ、「律法」を授かった人々がユダヤ教徒である。預言者イエスを通してギリシア語の「福音書」を授かった人々がキリスト教徒である。そして、預言者マホメットを通してアラビア語の啓示を受け取った人々がイスラム教徒である。

2. 神・アッラー

アッラー(神)は、日月星辰、大空と大地、山川草木と地上のあらゆる生物等、宇宙の万物の創造者で、自然には守るべき秩序、人類には従うべき規範を授けた。この人類の従うべき規範を『コーラン』である。それは元来、水場に至る道、それを知らなければアラビア半島のような乾燥地帯では確実に死に至る道を意味する。唯一の神への絶

対的服従は、具体的にはシャリーアへの絶対的服従であり、とりも直さず来世で天国の生活が保証されるた一つの方法である。コーラン第2014節に、「我は唯一の神。されば我に仕え、心に念じて礼拝せよ」と命じ、「言え、彼こそ唯一の神。生んだことなく生まれたことなし。並ぶべきものなき唯一のもの」(第112章)。これはイエスを神の子とするキリスト教を否定したのである。唯一の神は永遠にして、全知・全能である。神は、「クン」という一語で万物を創造した」(第2章117節)。コーランには、神が自らの姿をかたどって人間を創造したという観念はない。

3. 『コーラン』

神の啓示がマホメットに下り、それを記録した書物が『コーラン』である。「コーラン」とは、「読誦する」という意味である。信者は会堂(モスク)で、「コーラン」を唱えるのである。「コーラン」の教えの中心は、迫りくる最後の審判と終末についての警告である。

マホメットは最初の頃エルサレムに向かって礼拝し、ユダヤ教の贖罪の日である1月10に断食をしていた。しかしユダヤ教徒はマホメットを偽預言者呼ばわりしたので、ユダヤ教と対決して、624年にメッカに向かって礼拝するように改め、9月の一ヶ月間をラマダーンの月とし、断食を課した。モーセのシナイ契約(十戒)を「これこそ保管された石板に記された榮光に満ちたコーラン」(56章77〜78)という。また、「これこそ大切に守られたキターブ(啓示)の尊いコーラン」(第85章21〜22)という。

4. 教義(6信、5柱)

- (1) 6信 ①唯一の神アッラー、②天使、③啓示(コーラン)、④

預言者、⑤来世、⑥宿命の六つを信じること。

(2) 5 柱 ①信仰告白、②礼拝、③断食、④喜捨、⑤巡礼の五行である。

イスラム教徒は、「神は唯一にして、マホメットは神の使徒である」と唱え、メッカの方向に向かって、日に5回礼拝する。

5. ヒジュラ暦

暦は、国家と支配者の紀元に関わるものである。古代ローマは、皇帝の即位の年代から暦を定めた。新約聖書ルカ3章に「皇帝ティベリウスの治世第15年」という記事がその事例である。英国では、国王制度が今も健在である。しかし暦は、普遍史（西暦）⁽¹⁾を用いている。さて、日本である。日本国は、神武天皇の即位を紀元節として、昭和の敗戦後も、昭和、平成と現代に至る迄天皇暦を継承し2月11日を建国記念日として祝っている。国内の公文書はすべて天皇暦を使用しなければならぬ。世界でも珍しい現象であろう。

西暦（キリスト暦）はキリストの誕生を紀元とする。即ち、B.C. (Before Christ, 紀元前) と A.D. (Anno Domini・主の年) である。キリスト教国はこれを用いる。

イスラム教の暦はヒジュラ暦という。これは、マホメットが迫害を受けてメッカを脱出してヤスリブに移住（ヒジュラ）した日（西暦662年）を紀元とし、太陽暦（1年を354日）を用いて、イスラム世界では唯一の公式の暦としている。

6. 信者の実践的義務

(1) 礼拝

礼拝をアラビア語では「サラート」という。これはユダヤ教徒とキリスト教徒がアラム語で礼拝していたのを取り入れたのである。サ

ラートの語源は、アラム語である。礼拝は額を地につける「スジュード」(平伏)である。それは被造物としての人間の神に対する感謝と服従の念の外的表現である。礼拝は、夜明け、正午、午後、日没時、夜中の1日5回を義務としている。

(2) 断食と巡礼

断食（サウム）は、ラナダーンの月9月である。これは、『コーラン』第2章183〜187節に記されている。これは、日没から翌日の日の出までは自由に飲食できる。

巡礼はメッカのカバーへの巡礼で、コーランには規定されていない。マホメットが神に召される日も遠くないのを悟って「別離の巡礼」をしたことを先例として起こった。

(3) ジハード

イスラムの勝利のために異教徒と戦うことを「ジハード」という。中国のイスラム教徒は、この言葉を「聖戦」と漢訳したが、本来は、「神の道において努力する」の意味である。ジハードにおいて命を失った者は殉教者（シャヒード）であり、「信仰に入り、神の道において全財産と生命をなげうって戦ったものは、神のみもとで最高の位にあずかる。彼らこそ終わりをまつとうするものである」（第9章20節）という約束は、殉教者に来世の天国が約束されたものと信じられている。

『コーラン』第17章33節には、殺人を禁止しながらも、正当な理由もなく殺された場合には、相続者に血の復讐を認めている。血の復讐は、「目には目を」というタリオ（同害復讐法）で、マホメットは厳密な同等性を認めた。

(4) 食物規定

『コーラン』で禁じられている食物は、「死獣の肉、流れ出る血、ブタ肉、屠殺に当たってアッラー以外の名の唱えたもの」(第6章245節)だけである。

偶像と並んで、酒と賭矢と占いも禁止されている。これらは、多神教と密接に結びついていたのが禁止の理由とされている。

(5) 結婚

『氣にいった女を二人なり三人なり、あるいは四人なりめとれ』(第4章3節)の啓示は、マホメットの意図したことは、戦死したその未亡人と孤児の生活を保証するため、余裕のあるイスラム教徒に妻を公平に扱うことを条件に、できるだけ多くの妻を娶るよう奨励したのである。アメリカの開拓時代に移住したモルモン教徒も同じ方法を採用した。

7. イスラム教徒の分布

イスラム教徒の数は、ほぼ5億3500万と推定されている。その主な地域は次の如くである。(キリスト教徒の数は、9億4000万)

(1) アラビア半島・イラク・シリア・ヨルダンなど西アジアの諸国、3000万。

(2) トルコ・イラン・アフガニスタンからなる西アジアの非アラブ諸国、7500万。

(3) エジプト・スーダン・モロッコのアラビア語を国語とするアフリカ諸国、7000万

(4) ソマリア・エチオピア・タンザニア・マダガスカルのアラビア語を国語としないアフリカ諸国、6000万。

(5) インド亜大陸、1億5000万。

(6) インドネシア・マレーシア連邦・シンガポール・フィリピン、1億。

(7) ソビエト連邦(旧)、3000万。

(8) 中国、1500万。

(9) ヨーロッパのバルカン半島、500万。

(10) アメリカ合衆国には、1965年の新しい移民法によって中東やアジアからの移民が容易になり、600万人のムスリムがいる。モスクは1400ある。

参考文献

- (1) 『イスラーム辞典』岩波書店 2002年
- (2) 大島直政『イスラムからの発想』講談社現代新書 昭和56年
- (3) ひろさちや・黒田壽郎『コーラン』鈴木出版 1992年
- (4) 嶋田襄平『イスラム教史』山川出版 1978年

六、補遺

我々の国には、無宗教を自認する人が多い。私の宗教学の受講者に、君は特定の宗教を信じていますか、と訊ねてみると、殆どの学生は無いと答える。しかし、それらの学生も神社参拝はしているのである。

文化庁の統計によると神道系の信者は118,384,233人、仏教系は89,033人である。もともと、この数字は神社に参拝した数と仏式葬式に参列した人数から算出したもので、正確ではない。

神道も仏教も、いわゆる「生活宗教」ではない。まず、食物についてのタブーはない。ユダヤ教とイスラム教は、明確な食物規定がある。宗教とは、「規範」とあるという理解が我々日本人に欠如している。キリスト教にも食物規定はない。もともと、ピューリタン(清教徒)の

人々は、禁酒禁煙をモットーとしている。しかし、特定の食べ物を禁じているわけではない。キリスト教徒は、日常生活において、神に対しては礼拝と祈りと聖書朗読を大切に、隣人愛に努めているのである。これらの習慣は神道にも仏教にも見当たらない。正月の初詣と葬式には付き合う。これが我々日本人の文化としての宗教である。しかし、アジア、中東、西洋の人々の宗教は、「法」「規範」である。この認識が国際文化の交流の時代に求められる。我々は、宗教の異文化を理解しなければならぬと思う。

ちなみに、世界の宗教分布の概況はつぎの通りである。キリスト教徒32・55%、イスラム教徒16・5%、ヒンドウ教徒13・3%、仏教徒6%、ユダヤ教徒0・4%、である(『世界キリスト教百科辞典』)。また、キリスト教徒のうちカトリックが18・5%、プロテスタントが6・4%、東方正教2・8%その他諸派5・1%である。

これら宗教が優勢である国々は次の通りである。プロテスタントの国は、カナダ、アメリカ合衆国、北欧諸国、ドイツ、イギリス、イス、オランダ、南アフリカ共和国、オーストラリア。カトリックの国は、メキシコ、キューバ、アルゼンチン、ブラジル、オーストリア、ベルギー、チェコ、フランス、ハンガリー、ポーランド、スペイン、イタリア、ポットガル、フィリピンである。東方正教はアルバニア、ブルガニア、ロシア、ルーマニア、ギリシャである。イスラム教は、サウジアラビア、イラン、イラク、レバノン、パキスタン、トルコ、インドネシア、マレーシア、リビア、エジプト、アゼルバイジャンなどである。仏教国は、ミャンマー、ラオス、タイ、スリランカなどである。ところで、キリスト教国アメリカのイスラム教徒は7百万人、モスク(礼拝堂)の数は1400であり、イラク戦争には多くのイスラム教徒と牧師も従軍している。キリスト教徒の次に多いのである。アメリカに住むユダヤ人は6百万人である。ユダヤ人の数は本国イスラエ

ルより多い。インドのイスラム教徒は、1億人である。ヒンドウ教徒とイスラム教徒の間だけに摩擦が起こるわけである。逆に、イラン、イラク、エジプトにも多数のキリスト教徒が存在する。中東のキリスト教は、東方のギリシャ正教会である。かつてのイラクの首相もクリスチャンである。イラクのキリスト教徒は人口の7%、70万人である。エジプトのキリスト教徒は人口の一割で、大統領もクリスマスには教会の礼拝に出席するのである。クリスマスは12月25日ではなく、1月7日で国の祝祭日としている。イスラエルにもユダヤ教徒だけではなく、イスラム教徒もキリスト教徒も多数住んでいる。ベツレヘムの市長はパレスチナ人である。2003年9月19日の『朝日』によると、政教分離を原則に掲げるフランスで、イスラム教徒の女生徒がスカーフ姿で授業を受けられる高校が北部リールに開校した。信徒数がキリスト教の次に多く、信徒は400万〜500万人なのに、独自の高校を持たなかったイスラム教徒にとって画期的な第一歩だと報じている。世界の国々は、単一民族によって構成されているのではない。宗教的多元主義の国である。日本も同様に単一民族ではない。

独自の宗教を絶対化し他者を容認できない人を原理主義者という。かつての日本のように、権力によって特定の宗教を強要する場合も要注意である。ユダヤ教とイスラム教だけではなく、キリスト教にも原理主義者(ファンダメンタリスト)が少数ながら存在する。原理主義者は宗教だけではなく、イデオロギー、政治思想においても同じことが起こる。国際化とは、全ての国々の文化と宗教と理念、即ち、文化の多様性(多文化主義)を容認し受容する視点をもつことが必要であろう。

2003年10月4日

参考文献

一. 序

- 司馬遼太郎『アメリカ素描』読売新聞社 昭和61年
 村上重良『日本宗教事典』講談社学術文庫 1888年
 大野 晋『日本語をさかのぼる』岩波新書 1978年
 大法輪編集部『仏教・キリスト教・イスラーム・神道どこが違うか』平成4年
 富坂キリスト教センター編『キリスト教と大嘗祭』新教出版社 1988年

二. 日本の宗教

- 阿満利磨『日本人はなぜ無宗教なのか』ちくま新書 2001年
 八木誠一・秋月龍眠『般若心経を解く』講談社 昭和60年
 安良岡康作訳注『歎異抄』旺文社文庫 1974年

三. 仏教の源流

- 渡辺照宏『仏教』岩波新書1995年
 宇井伯壽『日本佛教外史』岩波書店 昭和43年
 増谷文雄『日本人の仏教』角川選書 昭和58年
 常磐大定『日本佛教の研究』春秋社版 昭和18年
 ひろさちや・佐古純一郎『仏教とキリスト教との対話』すずき出版 1994年

四. ヒンドゥー教

- 『ヒンドゥー教の本』学習研究社 1999年
 『インド。南アジア』講談社 1985年
 佐藤宏・内藤雅雄・柳沢悠『インドI』弘文堂 平成4年
 長谷川明『インド神話入門』新潮社 1993年
 ひろさちや・服部正明『ヒンドゥー教の聖典』すずき出版 1993年

五. 啓示宗教

- I. 石田友雄『ユダヤ教史』山川出版社 1986年
 山本七平『聖書の常識』講談社 昭和58年
 ひろさちや・石川耕一郎『ヤダヤ教の聖典』鈴木出版社 1993年
 II. 半田元夫・今野国雄『キリスト教史』山川出版社 1984年
 『聖書』日本聖書協会
 III. 大島直政『イスラームからの発想』講談社現代新書 昭和56年
 ひろさちや・黒田壽『コーラン』鈴木出版社 1992年
 『イスラーム辞典』岩波書店 2002年